

定時制高校に入学するにあたって、私は「働きながら学ぶ」を実践するため、アルバイト先を探した。中学を卒業したての私を雇ってくれたのは、とあるスーパーだった。特にどこで働きたいという希望もなかった私は、当時兄がアルバイトをしていたそこへ面接に行き、後日採用との連絡を受けた。

スーパーにはいろんな部署がある。日用品、食品、青果、精肉……そんな中、私はチェッカーという部署で働くことになった。

チェッカーの仕事は、お客さんの持ってきた商品の精算を済ませること。つまり、お金を扱うレジ。15という年齢だったため、この部署だけは無いだろう、と思っていただけに驚いた。

数日後、研修に入った私は、働くことのきつさを身を持って体験した。

レジで要求されることは主に三つ。

1. 笑顔
2. 親切な言葉遣いで丁寧な応対
3. 正確な金銭授受

レジとはお店の最後の顔。ここでの印象がお店全体の印象に繋がってくるため、笑顔・言葉遣い・応対がとても大切になってくる。そして一番重要なものが三つ目の「金銭授受」。ここでの間違いは、お店の印象を悪くするだけでなく、お客さんからの信頼すら無くしてしまう。そう教えられたのに、いざレジに立って練習してみると、思った以上に難しかった。

笑顔を意識すると言葉が上手く出てこなくなり、言葉を意識すると金銭授受が正確に出来ず、金銭授受の正確さを気にすると笑顔が出ない。この悪循環にはまってしまい、焦って焦って、全てが出来なくなった。

「焦らなくていいよ、一つずつ確認しながらゆっくりやっていこう。」

チーフが声をかけてくれるが、たった三つのことが出来ない自分が嫌になり、レジの仕事をこなすことに自信が無くなり辞めたくなった。このことを母に相談すると、

「ちゃんと頑張らないうちからそんなこと言ったら、この先何も続けられないよ。」

と叱られた。今まで一つのことを長く続けたことが無く、途中で投げ出してきた私は一言も言い返せなかった。言い返せなかったことが悔しくて、ますます自信を無くし、翌日、発熱を理由に休みをもらった。そして、その日は「何故働くのか」について考えた。

「生きて行くため」というのは間違いなくあると思う。でもそれだけの理由だけではないはず。例えば「好きな仕事」や「目標に近づくための仕事」など。こんな理由で働くことが出来れば幸せだろう。ただ、これを自分にあてはめてみるとどうだ。親元にいるから生活費の心配は無い。スーパーでレジを打ちたいから、と面接を受けたわけでも、何か目標があるわけでも無い。ただ「定時制高校」に入学したから。それだけだった。

3年前のあの日、考えて考えて、考えぬいた上で出た結論はこうだった。「目標が無いなら探せばいい。わからないなら考えればいい。とりあえず続けていれば少しは見えてくるかもしれない。」

その結果、目標だって見つかった。働く理由も何となくだけどわかった気がする。このスーパーでの時間は、私にとっても貴重な体験をさせてくれた。働くことの大切さはもちろん、人とのコミュニケーションの取り方を知り、視野が広がったと思う。

以前私はお客さんの態度に対し、敏感に反応してしまって、すぐに落ちこんだり、イライラしていた。落ちこむと、接客時に全く笑顔が出せなくなり、ひどい時では泣きそうになりながらレジを打っていた。イライラした時は、表情が険しくなり、商品の扱い方が乱暴になることがあった。その度にチーフや先輩に「笑顔出して頑張ろう」「大丈夫、大丈夫。気にしないでいいよ」と声をかけてもらい、はげましてもらいながら頑張ってきた。

でも、一度だけどうしても立ちなおれない程落ちこんだことがあり、泣きながらレジの先輩に相談したことがある。

その時、私はお客さんのクレームで落ちこんでいた上、過不足を頻繁に出していた。

レジに立つ度に胃が痛くなり、頭痛もはげしく、座りこんでしまいたくなるほど。こんな状態だから、笑顔も丁寧な対応も、正確な金

銭授受も全てが出来なくなり、一度に1万円近い過不足が出るが増え、一番最初の悪循環以上の悪循環に陥ってしまっていた。「もう嫌だ。きつい。辞めたい。お客さんが怖い」こんな弱音をその先輩は、ずっと静かに聞いてくれた。私が泣き止むのを待って、先輩が言ってくれた。

「樋口さんだけじゃないよ。レジさん全員が同じような思いをして、それを皆で協力してのりこえてきたの。嫌なことがあったら、いつでも相談にのるから。ね、一緒にのりこえて行こう。」

この時程、このお店で働いていて良かったと思ったことは無い。この日以来、少しずつではあるけど、お客さんの態度やクレームに対して、受け入れる余裕が出てきた。そしてこの余裕が、学校を卒業するまでずっと、このお店で働きたいという気持ちに繋がった。

私にとって、当初働く理由が何も無かった。でも今は大学進学に向け貯金をするという目的があり、当時15歳で「定時制高校」に入学するという私を雇ってくれた店長。初めてのアルバイトで右も左も知らない私に、一から親切に教えてくれたチーフ。落ちこんだ時、相談にのってくれた先輩たち。そしてずっと支えてくれてきた両親に恩返しをしたい。この気持ちが、今の私にとって「働く」理由として十分だった。